

さようなら、古川 明先生

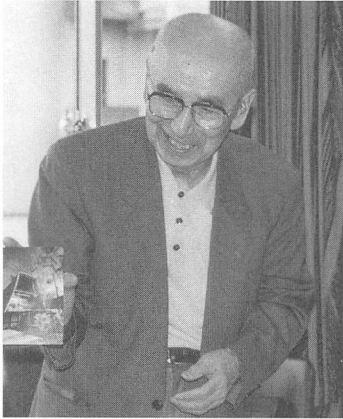
新日本製鐵(株)人事・労政部主任医長
日本医史学会会員

金山 知新

「ザンメルズフト」突然、耳慣れないドイツ語が先生のお口から出たので、多分、キョトンとしていた私に、先生はいたずらっぽく微笑みながら「ザンメルズフトなの」と重ねておっしゃった。古川先生はその物腰やお顔ばかりでなく、言葉も穏やかで優しかった。一度お宅にお邪魔した際「今、蛙の腸閉塞の手術したの」にはびっくり。お庭のガマの肛門から長々と飛び出した腸を「切って押し込んだけど、腹膜炎で死ぬでしょう」と優しい口調にすぐわぬ蔑しいお見立てで、外科医古川明先生を再認識させられたものだった。

先生は一九〇五年東京のお生まれで、一九二八年に慶應義塾大学医学部を卒業された。医師となった戦前から医学関連の切手を中心に収集されたというが、戦災でその全てを失われた。しかし先生の「ザンメルズフト」はいささかも衰えず、一九四六年十二月、戦後初の記念切手が発行されたのを機に、切手収集は再開されていた。

古川先生と医学切手の関わりが、DNAの命ずる単なるザンメルズフトにとどまらず、畢生の大研究にまで発展した陰に、二人のキーマンが居た。戦後間もなく、アメリカ文化センターが東京・日比谷に開設した図書館で、たまたま先生は切手週刊誌 “Weekly Philatelic Gossip” を手にされ、米国人医師



Garhard J. Newerla が連載していた“Medical history in philately”なる一文に目を留められた。ただ単に好きな医学切手を集めるに過ぎなかつた先生にとつて、切手を介して医学の歴史に踏み入る、といったスタンスは恐らく目の覚める思いだつたに違いない。

Newerla の手法を会得された先生は、一九五四年一月から三共の「治療薬報」に「医学の切手」の連載を開始された。以後、約一八年間も続いたこのシリーズは、多くの医療関係者を啓発することになった。更に先生は一九五五年、第十四回日本医学会総会に「医学に関する切手さまざま」を展示された後、改めて医学史の知識の必要性を痛感されたよう
で、一九五八年四月に当医史学会に入会された。

翌一九五九年は古川先生と故・緒方富雄東大名誉教授との交流が始まる重要な年となつた。緒方教授はご自分が創刊された週刊「医学のあゆみ」に、この年から医学切手に詳しい解説を付けて掲載されたが、その切手は古川先生が探してこられた中から選ばれた。その後一六年間続いたこの連携プレーの中で、古川先生は緒方教授の深遠な学識に直に触れ、それを自在に使つて切手を説き明かす術を十二分に学ばれた筈である。一九七五年からは緒方教授に代つてご自身で切手解説を担当され、これは一九八三年まで続いた。

こうした多年の切手解説をまとめた大著『切手が語る医学のあゆみ』が一九八六年四月十五日、医歯薬出版から刊行された。先生の代表作となつた本書は、切手を彩りにした見事な医学の歴史書として、今なお他書の追隨を許さない。しかしこの本をまとまつた医史学書の体裁に、と強く助言したのは他ならぬ緒方教授だつたと聞く。Newerla によつて開眼した古川先生は、緒方富雄教授の薫陶をとことん受けて、ここに世界的な医学切手研究者として大成されたのである。一九八八年には日本医史学会名誉会員に推され、また一九九四年五月には、『切手が語る医学のあゆみ』の英語版『Medical History Through Postage Stamps』で第六回矢数医史学賞受賞の榮譽にも輝かれた。

今年二月十四日に九十七歳になられた先生は、三月十日、ライフワークの集大成『医学と薬学のシンボル——アスク

レピオスの杖とビギエイアの杯』を上梓され、早々に我々（自称）門弟にも一冊ずつご惠贈下さった。そのお礼、お祝いを申し上げる間もなく、五月二十六日他界されたが、未だに夢のようである。八月某日、有志数名相集い、杉田玄白の墓所猿寺も近き芝・愛宕の青松寺に、ご戒名「仁天院明道清鑑居士」こと古川先生を詣でた。

古川先生。我々に到底先生のような長生きは適いません。直にお側に参ります故、それまで、さようなら。